

過去、英雄と言われてきた人達はこの程度のことは軽くクリアしてきた。

戦国時代を例にとれば、信長などは自分を神として崇めさせようとし、神(自分)は何をしても良いのだ、と思っていたとしか言いようのない所業をし、なお益々元気であった。

信長も西郷も、末は非業の死を遂げるが、プロセスは全く違う。

今書いたように、西郷は革命を成功させる手段として相楽らを使って、あこぎなことをしている。

信長など、そのような行動は日常茶飯事であった。

病氣と偽って、弟を自分の城におびき寄せ、騙し討ちするなど軽い。それを見ていて、分かったうえで、彼に協力してくれた人でも、自分の役に立たなくなれば容赦なく切り捨てた。

西郷の場合も、維新が成ると、新政府の都合で相楽らを闇から闇へと消すことを黙認した。

本人が命じたことでないにしろ、維新の最高責任者として知らなかったはずは無い。

**このあたり、過去の英傑達は、そういう事態が起きても「大事の前の小事。大きな志のため」と割り切っている。**

大久保などは、黒田清隆が酔ったうえ、妻を惨殺した時、国(自分)にとって黒田が必要、と判断すると、その事件を強引に“事故”で済ませてしまっている。

**事の善悪はともかく、政治とはそういうものなのであろう。**